

ば、是等の奴隷は一般に捕虜であつて、一纏め幾らと云つて賣買せられたので、彼等の労働の價值を測定することは出来なかつたし、且つ其生産力の貨幣價値の、容易に算定し得ないやうな狀況の下に働いてゐたからである。

農業と都會の手工との間の社會的分業が、國民の内部に於ける商業を増進して居る所では、商業は、單にそれが異りたる生産國民間の仲介者たる任務を勤めて居る場合より、遙かに大なる影響を生産的活動の上に及ぼすことは明白である。けれども如何なる場合にも、常に其影響は主として消極的であり、腐蝕的であり、破壊的である。

商業が生産的活動を枯死せしめる、有害な影響を及ぼすの範圍は、此影響を蒙る種々なる生産方法の、安定力と抵抗力との大小に依ることが大である。それは埃及や印度の、世襲族藉や自治體の如き制度には、深く侵入することが出来ないが、之に反して普通の分業は、迅速に之を奴隷制度に變じ家長的の奴隷制度は、之を剩餘生産物を生ずる奴隷制度に變化する。

斯くの如き、内國に於ける商業の發達と手を携へて、金貨の資本が發達する。土地の私有が一度び確立し、商業は最早や、折ふしの剩餘生産物から旨い汁を汲ふことに止まらないで、剩餘生産の堅實なる増大を促がすようになる。小地主は、譯なく金貨の餌食となる。收穫の外づれ、牝牛や馬の斃死、戦争などは、既に土地を抵當として居る小地主を、金貨の手に委するに充分である。

そこで古代を通じて、商人の資本は、商業上、理財上（即ち金貨の）の資本といふ形態を取ることを見るのである。古代にあつては、これ以外の如何なる形態の資本をも見なかつた。また如何なる處にも、自由労働者の労働の、直接の賣買と、利潤の爲にする之が搾取とを基礎とする資本は存しなかつたのである。そして市場に現はれる剩餘生産物は、常に、生産物が直接消費の所要に超過したものであつた、資本は全然、又は大部分、流通界に於いて、剩餘生産の掠奪者たる役割を演じたものである。

商業の發達につれて、産業に對する其支配は擴大する。資本制以前の社會進化の諸段階にあつては、商業は産業を支配する、然るに近世の社會にあつては、事實は此の逆である。固より商業は、多かれ少かれ、互に商業を營んでゐる社會の上に作用する。即ち商業は、愈々益々享樂と生存とを生産物の直接使用の上により、生産物の販賣の上に懸らしめ、其結果として、愈々益々生産を交換價値に従屬せしめて來る。そして之によつて、商業は舊狀態を分解し、貨幣の流通を増大する。商業は最早や、單に生産物の過剩を捕捉するに止らないで、愈々益々、生産そのものを腐蝕し、生産の全領域を已に従屬せしめる。尤も此分解作用は、生産に従事する社會の性質に懸かること大である。そして商人の資本が、未開社會の間に於ける、生産物の交換を促進して居る間は、商業は唯だに欺瞞と騙取の形を取るばかりでなく、主として斯くの如き方法から生ずるものである。商業は諸國の生産物の價格（差）の差異を着服するといふ事實（此點に於いては、商業は商品の價値を平均し、一定するの傾向がある。）は暫く措くとしても、當時の生産方法の結果として、商人の資本は、互ひに交換を營む社會間の仲介者たる資格に於ても、剩餘生産の大部分を自己の有とするやうになつた。之れ當時是等の社會は、尙ほ主として使用價値の生産に従事したものである、其生産物の一